

マーテロウ塔から南東に約1.5kmのところにあるドーキーの学校でスティーヴンは臨時雇われ教師として、「歴史」についての授業を行っている（「計画表」によれば、本挿話の学芸の項目は歴史）。イギリス式の教育を行う本校にあつて、富裕層であるプロテスタントの子どもたちは、生意気で学習意欲に乏しいが、スティーヴンが教室をコントロールすることのできない教師に不向きな者であることを見抜いている。授業中に不熱心なのは生徒たちだけではない。生徒トールボットにミルトンの詩を「暗唱」させているあいだ、スティーヴンはヘインズが言った言葉——「歴史に罪があるようだね」（U-Y 2.40）——を思い出し、アリストテレスの諸概念（可能態と現実態、靈魂と形相）について考える。授業の最後で、彼は生徒たちから請われて「謎々（riddle）」を出題する。

雌鶏鳴いた、

空青かった。

天の鐘打つ

十と一つ。

かわいそうなこの魂

今から天へいざ旅立つ。（U-Y 2.54）

本来の謎々の答えは「母」であるが、スティーヴンは「狐が亡くなったお婆ちゃんを柁の下に埋めているんだ」（U-Y 2.54）と答えを明かす。その後、算数の質問に来たサージャントのか弱く不器用な様子を見ながら、母のことを想起する（55頁の「紫檀と湿った灰の匂い」は15・23頁で語られたことの反復である）。

生徒たちはホッケーをするために運動場に向かい、スティーヴンはデージー校長の書齋へ給料をもらいに行く。イギリスびいきの校長は、金を貯める貯蓄の意義を語り、アングロ・アイリッシュのプロテスタントから見た19世紀の歴史を語る（しかし、そこにはいくつもの事実誤認がある）。口蹄疫についての投書を新聞社に届けてくれと頼むデージーが、最後の文言をタイプライターで書くあいだ、スティーヴンは「今は亡き名馬」たちの絵を眺める。英国がユダヤ人商人によって支配されていることを嘆く校長に対し、「光に背いた輩」であるのは誰しも同じであり、「歴史とは……僕が目覚めようとしている悪夢なんです」（U-Y 2.66）と言う。これに対し、老人が「すべて人間の歴史は一つの偉大な目標(goal)に向かって動くのです、神の顕現に向って」と言うや否や、運動場で「ピッピーッ！」とゴールが決まり、スティーヴンは「あれが神です。……街の叫び声です」と述べる（U-Y 2.66）。反ユダヤ主義と女性嫌^{ミソジニー}いを露にする校長は『オデュッセイア』における賢人ネストールに対応するが、ギリシアの英雄とは異なり、スティーヴンはもはや「ここでこれ以上学ぶものはあるのか？」と自問せざるを得ない（U-Y 2.67）。



本挿話のモデルとなったドーキーのサマーフィールドにある学校と運動場。ウィリアム・ヨーク・ティンダルの*The Joyce Country* (1960)より（写真は*The Joyce Project*のウェブサイトから借用）。